

【2007年度第1回研究会発表要旨】

排泄時の消音行為と日本人女性：トイレ用擬音装置にみる羞恥とジェンダー

多賀昌江

目的

日本人女性は公共のトイレで平均 2.5 回水を流すといわれている。その理由は、女性が排泄時の音を羞恥と感じる「トイレ文化」が江戸時代から存在し、トイレの水を消音のために排泄時と後に流すためである。このような現代の日本人女性における排泄行為を規定する「トイレ文化」が、どのように継承され変容してきたかについて考察する。

背景

日本の公共トイレや大学、企業等の女子トイレには、排泄時の音を消音するための擬音装置が設置されているところがある。1979年に東京のトイレ機器メーカーが節水型簡易水洗トイレの開発をした際に、このトイレを使用した女性達から「もっと水の音を大きくして欲しい」という要望を受けて考案し、「エチケットーン」という商品名で売り出された。この装置は、センサーによって 80dB の流水音を発生させることによって、排泄時の音を同時にかき消す仕組みとなっている。現在では「音姫」などの数社の機種があり、「トイレ文化」によって消音に使われる水の節水と経費削減にも高い効果を上げるため、学校や企業の女子トイレにも広く普及している。

日本人女性の「トイレ文化」は、どの時代から発生し今日に伝承されているのだろうか。江戸庶民風俗研究者の渡辺（1993）は、日本人女性の「トイレ文化」が江戸時代には存在していたことを記述している。1763年の刊行物には、女性の年代による小便の音の違いを比較し描写している記述があり、また男性が女性の小便の音を立ち聞きして嫌がらせたことを詠んでいる川柳や

小便も女の音は気にかかり（「最破禮」1796）

と、ある身分の高い女が、排泄の音を消すために手水場で小女に水を流させたという逸話を詠んだ川柳が記述されている。渡辺（1993）ほかによると、江戸時代には排泄の時にでる音を消そうとする方法は他にもあった。例えば、上流夫人が外出するときには土瓶と紐に結わえられた拳大の泥饅頭を使用したという。土瓶は排尿時に同時に水を注いで消音するために使われ、泥饅頭は排便時に上から続けて落として音をごまかした。付き人がトイレの外で手水鉢の水を柄杓ですくって流し続けることもあったらしい。音けし壺という青銅製の壺は、トイレに置かれていた排泄の音を消音するために使用された。壺の下の方に蛇口のような栓がついていて、身分の高い姫などがトイレに入るときにこの栓を抜いて水を出し、その水の流れる音で排泄の音を消音した。そして、トイレからでたあとはその壺から流れる水で手を洗った。他に懐紙を便器のなかに落とし、そこに小便をめがけて音の氣勢を防ぐ紙による消音方法もあった。

このように、日本人女性の「トイレ文化」は少なくとも江戸時代から存在し、排泄時と同時に水を流して消音する方法は、時代の変化によって変容することなく近年まで継承されてきた。それが節水を目的としたトイレ用擬音装置の登場によって、消音の方法が装置の利用に代替されつつある。

日本人女性と外国人女性の「トイレ文化」の比較

日本人女性の「トイレ文化」は世代を超えてどのように継承され、その文化の背景にある心

理は何なのだろうか。そして、この「トイレ文化」は日本人女性だけにみられる行為であるのだろうか。文化によってトイレの構造の差異があるが、本研究では「トイレ文化」の通文化比較を行うために、2002年から2003年までの1年間に、札幌とアメリカのオレゴン州ポートランド市において合計140人の女性を対象としたアンケート調査と聞き取り調査を実施した。調査対象者の内訳は、15歳未満から65歳以上までの日本人女性100名、在外国人女性が28名、在日外国人女性が14名である。外国人女性の出身国別内訳は、対象者が多い順に、アメリカ、中国、韓国、台湾人、カナダ、マレーシア、フランス、スペイン、ラオスであった。

その結果、まず日本人女性に「これまで」排泄時の音を消すために、擬音装置を使用やトイレの水を流すなどして消音したことがあるかについての消音行為の経験の有無についてきいたところ、99%の女性が「消音したことがある」と答えた。また年齢による違いは見られなかった。これは、日本人女性が「トイレ文化」を慣習として身に付けている可能性が高いことを示しているといえる。

次に、「現在」消音行為を行っているかどうかを対象者全員に尋ねた。また、在日外国人女性には母国のトイレで消音するかどうかについて尋ねた。その結果、日本人女性は、「いつも消音する」人と「ときどき消音する」人の合計の割合は93%であり、擬音装置が設置されている場合には、多用されていることがわかった。外国人女性のトイレで「いつも消音する」人と「ときどき消音する」人の合計の割合は、在日外国人女性は83%、在外国人女性は43%である。これは日本人女性以外でもトイレで消音する外国人女性が存在し、在日外国人女性においては、日本人女性の「トイレ文化」に影響され、文化変容を生じたことが考えられる。

では、擬音装置がない外国人女性はいったいどのように排泄の音を消音しているのだろうか。「消音する」と答えた在外国人女性に具体的な消音方法を回答してもらったところ、多くの韓国人女性は、「韓国にも同様のトイレ用消音装置があるので使用する」、または「機械があっても排泄時に水を同時に流す」と答えた。韓国人以外でもアメリカ人、スペイン人が「水を同時に流す」と答えた。それ以外の消音方法として、咳払いをする、手洗いの水を同時に流す、手を乾かす機械を誰かが使用しているときに排泄する、排泄の音が大きくなるように尿量を調節したり肛門を締めたりする、というものであった。したがって、排泄時の音を羞恥と感ずる「トイレ文化」は、日本人女性に顕著に存在するが、外国人女性においても存在する文化と言えるだろう。

それではなぜ女性は排泄時の音を消音するのだろうか。女性が消音したいと思う心理には、羞恥の意識と環境要因が関連しているのではないかと思われる。そこで、「自己」と家族を含めた「他者」の存在との関係を明確にする目的で、日本人女性が排泄時に消音するトイレがある環境について調査した。その結果、女性が消音する機会の多いトイレの環境は、順に「公共のトイレで他人がいる場合(88%)」、「他人の家のトイレで排泄の音が外に聞こえる可能性のある場合(74%)」、「大便やおならなど大きな音のする可能性のある場合(49%)」、「自宅のトイレで他人に排泄の音が聞こえる可能性がある場合(46%)」、「公共のトイレで自分しかいない場合(27%)」となった。この結果から、日本人女性の消音行為は、排泄の音が聞こえる可能性のある「他者」の存在を強く意識し、「他者」への配慮と排泄の音に対する特別な羞恥心とによって消音する普遍的な文化であると考えられる。

さて、このような日本人女性の「トイレ文化」は世代を超えてどのように継承されるのだろうか。消音行為をはじめた年代ときっかけを尋ねたところ、消音行為をはじめた年代は、学校生活が生活の中心となる思春期頃が最も多かった。そして、洋式トイレ、和式トイレにかかわ

らず「他者」が消音している事実に気づき、その行為を模倣することから始まった習慣である、と回答した人が最も多かった。したがって、日本人女性の「トイレ文化」は、親から子へ受け継がれるものではなく、歴史や年代を超えて集団生活のなかで習得し、規定される排泄行為の文化である、と言えよう。

(たが・まさえ／札幌市立大学)

ツァータンの方位観と世界観：水平の彼方にある故郷

西村 幹也

本発表では、モンゴル北部に居住するツァータンと呼ばれるトナカイ飼養民の言動から、彼らの方位観と世界観を考察した。彼らが自分たちの居住地域をどのように位置づけて呼び表しているか、またシャーマンの言説などから、彼らが言うところの「北」が特別な意味を持っていることを明らかにし、これを軸にして「狩り場」、「トナカイ飼育・居住地域」、「行政・経済地域」が配置され、それらは彼らの象徴世界と対応していることを発表した。

1. ツァータンの居住地域

ツァータンはモンゴル国北部、フブスグル県とトバ共和国と国境を接する針葉樹林帯に、約30世帯ほどが居住している。オラーンオール郡、リンチンルフンベ郡などの森林部に居住していた彼らは1985年に作られたツァガンノール郡に集められ、南のオラーンオール郡からの移住グループと以前より生活していたグループの二つが形成された。ツァガンノール湖から西へと流れ出るシシギット川を中心にして、移住グループは川の南側に、元々いた人々のグループは川の北側に住み分けるようになった。そして前者のグループの居住地域を「バローン・タイガ」、後者を「ズーン・タイガ」と呼ぶようになっている。

2. 「ズーン・タイガ」と「バローン・タイガ」

モンゴル語で「ズーン」、「バローン」はそれぞれ、「東、左」と「西、右」と訳される。ところが、これら地域を「東タイガ」「西タイガ」と呼んだ場合、実際のシシギット川を中心にした居住地域が南北に分かれていることと矛盾してしまい、川の流れる方向を向いて上流を背にして川岸の左右を言い表す習慣に鑑みても、西へと流れるシシギット川を基準とした場合、「ズーン（左）・タイガ」と呼ばれる地域は実際は川の「右側」、そして「バローン（右）・タイガ」は川の「左側」に配置されており、やはり矛盾している。ツァータンたちはこれら矛盾の説明として、「祖先たちが移動してきた方向からみて、右と左なのだ」という。ところが、ツァータンの故地は様々であり、簡単にシシギット川を西から東へと移動してきたのだと言うだけでは説明できない。「ズーン」は「左」なのか「東」なのか？「バローン」は「右」なのか「西」なのか？これらを考察しはじめたのが、本発表のきっかけとなった。

3. ツァータンの空間認識

フィールド調査中に、「へールへ行く」という言葉を良く耳にした。「へール」とは「狩り場」を意味する隠語であるが、社会主義時代にトナカイ牧民として職を得、賃金を受け取るようになる前は、トナカイ飼育の目的は交通輸送手段の確保にあり、食料調達はもっぱら狩猟採集漁労活動に依存していたため、彼らにとって最も重要かつ神聖な地域と「狩り場」は位置づけられている。「狩り場」は非日常空間として考えられているのである。そして、日常生活空

間として、トナカイを飼育する宿営地のあるところ「タイガ」があり、さらに行政と関わり、経済活動を行う空間「ゴル」「トゥブ」が存在している。

これら3つの空間の性質から鑑みるに、かつてのツァータンが生活の基礎を置いた「ヘール」と「タイガ」が本来的にツァータンの活動地域となり、モンゴル人と関わるための場所が「ゴル」「トゥブ」といわれ、ツァータンにとっては新しい活動地域となる。モンゴルとの関わりが強くなればなるほど、「ゴル」「トゥブ」に近づくことになり、よりツァータン的生活を維持しようとすれば、「ヘール」との関わりが強くなっていく。

そして、フィールド調査では「ヘール」や、最良の狩り場と言われる「ボス」という地域や、先祖の故地なども、実際には西であるにもかかわらず北と捉えていることが観察された。いくつかの例から、実際の西を北と認識しているのである。

ツァータンのアイデンティティに非常に大きなウエイトを占める「ヘール」を北と認識し、「ゴル」「トゥブ」へ「タイガ」から出かけることを、「南へ行く」と言い表しているなどから、「ヘール」から「ゴル」「トゥブ」のラインが北から南へ配置されていると認識されながらも、実際のラインは90度ずれて西から東に伸びていることがうかがい知れる。

4. 北と言うところ

実際の西を北と捉え、なおかつ特別な場所としていることは、実生活の中における活動のみならず、歌やシャマン儀礼などからも類推できる。特にシャマンの活動においては、祖先の精霊が存在する場所を、実際には川の流れる先、西にあるにも関わらず、北にあると扱っている。

5. シャマンの魂の飛び先 ーまとめー

北を基準点として認識される狩猟採集漁労活動地域、トナカイ飼育活動地域、交易活動地域の3つの活動空間と、シャマンの活動によって区別される象徴的空間の配置がパラレルになっていることがうかがい知れる。すなわち、[「ツァータンの非日常的に利用される狩り場」「精霊のいる場所」「シャマンが儀礼中に行く場所」「集団の故地」「かつての居住地」「北」]=ヘール、[「ツァータンの日常的に利用する生活空間」「シャマンが実際に生活する場所」「現在の居住地」]=タイガ、[「ツァータンにとっての異文化空間」「全く異なる草原地域」「将来の居住地?」「南」]=ゴル・トゥブというように認識され、利用されているのである。

考察のきっかけとなった「ズーン」「バローン」の問題も90度ずらされた方位観と世界観で解決できるが、以上の空間認識の正当性についてはより多くのデータが必要であろう。今後、彼らが「ゴル」「トゥブ」という異文化空間に依存していく傾向は否めないが、それに伴って空間認識およびそれら空間の利用が以下に変化していくのか大変興味深い。これからもツァータン社会を引き続き観察していこうと思う。

(にしむら・みきや／帯広大谷短期大学)

日本人の食における乳・乳利用の意識：食・栄養の見地から

石井智美

はじめに

かつて人は子畜や、幼児が乳のみである程度の大きさまで育つことから、乳に「聖なる力」を感じてきたのであろう。そして乳は、世界各地で食に利用されてきた。米を主食として

きた日本人は長い間、乳との関わりが薄かった。そうした日本人の乳・乳利用の意識を検討した。

1. 乳の周辺

人が定期的に搾乳をする動物として、羊・ヤギ・牛・水牛・ヤク・馬・ラクダ・トナカイが挙げられる。これらの肉は食用となるが、宗教、地域によっては食べることを禁じているものもある。しかし、乳の食用に関するタブーは極めて少ない。

多様な食材利用で知られる中華料理では、乳・乳製品の利用は「白菜のクリーム煮」程度である。中国では早くから牛を使役動物とし、肉を食べながらも乳を料理に利用することは殆ど無かった。文化人類学で、文化が接触した時の上下関係について「上位は下位に影響を与えるが、その逆は起きない」と説明している。しかし中国における遊牧民の征服王朝は、食において漢民族に取り込まれ、その例外となった。

2. 人と乳

ヨーロッパの食における家畜利用は、その肉とともに、家畜を失わず継続的に得ることが出来る乳の利用が盛んであった。乳からバターをはじめ、様々なチーズをつくってきた。乳は、保存可能な食糧をつくる「素材」であったのだ。

そうしたヨーロッパで広く乳を飲むようになったのは、ワインの腐敗を防ぐための「低温殺菌法」が 20 世紀に確立したのを牛乳の殺菌に応用して以降である。今日日本では、乳を飲む割合が生乳生産量の 60% 近くを占めている。これは乳と関わる歴史がまだ新しい日本ならではの消費形態と言えよう。乳を飲むと腸がゴロゴロして不快な症状を示す乳糖不耐症は、乳中の乳糖が消化出来ないために起きる。乳の飲用を続けていると症状は出なくなるが、遺伝子的に乳糖不耐症であることは変わらない。幼児は乳糖を利用出来るが、大人になると利用出来なくなるのだ。これまで乳糖不耐症は劣勢遺伝とされてきたが、エネルギー摂取量の中で乳の占める割合が低いアジア地域では不利ではない。ゆえに乳糖不耐症をマイナスと捉えてきたこれまでとは別なアプローチが、アジアの食において可能なのではないかと考える。

日本の乳利用

飛鳥、平安時代には、牛乳からつくられた乳製品の一種である蘇、醍醐が税として都に集められていた。平安末期以降武士が台頭し、牛を飼っていた牧が馬の飼育場に転用されたことも、乳利用の衰退に関与したのではないかと考える。

我々日本人の食は、室町時代に現在に至るスタイルの原型が出来たとされる。室町時代、それ以降も家畜の乳の日常の食への利用は殆ど皆無であった。現在に繋がる乳利用が始まったのは明治維新以降である。乳と日本人の関わりの中で戦後に始まった牛乳給食の役割は大きい。そのきっかけは戦後の食糧難の時の、海外からの児童への脱脂粉乳の援助である。慣れない風味であったが、1杯のミルクに助けられたのだ。戦後、所得が上昇し欧米型の食事が登場し、乳・乳製品の摂取量が増えた。特に 14 歳男子の身長は、戦前よりも約 20cm も伸びた。これは牛乳摂取を含んだバランスの良い栄養摂取の賜物である。給食に牛乳がつく学校給食が、日本の乳利用のスタイルに大きな影響を与えたのだ。

今日の乳・乳製品の消費

昨年、牛乳を流通させる上で欠かせない加熱殺菌が「良くない」、「牛乳を飲むと骨粗しょう症になる」など、科学的な根拠のないパッシングが起きた。そして牛乳の消費低迷も続いている。

筆者の研究室で昨年、北海道内の都市部、地方の高校生、大学生の購入する飲料の調査を

行った。その結果、お茶、水などの購入頻度が高く、学校給食を離れると牛乳を飲む量、頻度ともに減少していた。「パンと牛乳」の朝食の組み合わせも、朝食抜きの傾向の中、過去のものになってきていた。働き盛りの男性への牛乳飲用アンケートでは、毎日牛乳を飲む習慣を持つ人は少なかった。さらに牛乳1Lの販売価格も「知らない」との回答が多かった。高校生、大学生が牛乳を飲まない理由に挙げたのが、「牛乳を飲むと太る」であった。この「太る」ということは、牛乳に栄養があるということから連想されていた。しかし牛乳のエネルギーに関する知識は少なく、マスメディアからの情報を信じ、食をイメージとして捉える傾向が強くなっていった。一方でここ数年、ヨーグルトの消費が増えている。外科手術前に継続してヨーグルトを食べると、「手術の予後が良い」、「早く傷口が塞がる」といった効果が医療の場から報告されている。さらにヨーグルトを食べると腸管を介して免疫力が上がり、以前に比べて抗生物質の投与量も半減したと言う。ヨーグルトの喫食は、抗生物質の効かない耐性菌の増殖を防ぐためにも安全で有効な手段である。ヨーグルトは乳中の乳糖が発酵に関与する微生物の働きによって減り、牛乳が苦手な人でも腸管に不快な症状が出ないこともあり、高齢者にも好まれている。

これからの日本人と乳・乳製品利用

食事には、変化を受けて変わりやすい部分と、変わりにくい部分がある。日本人はこれまで世界各地の味覚を積極的に取り入れてきた。日本風にアレンジされた外国の料理も多い。日本人の米への嗜好性は変わらないと言われている。学校給食で牛乳を飲んで育った人々が人口に占める割合を考えると、今後の日本人の乳・乳製品利用は「米と合う形での乳・乳製品の利用」が1つの鍵になるのではないかと。日本人にとって牛乳は、今日も健康のため、カルシウム供給源として必要であることを意識して、取り入れて行かなければならない食品である。これからの牛乳の飲用を進めて行くのか、保存、嗜好性からチーズ、ヨーグルトなど加工品の形での消費を進めて行くのだろうか。乳・乳製品両方の消費を進めて行くのだろうか。今後、どのように乳・乳製品が選択され、どのような「日本型の乳食文化」が形成されて行くかを見つけて行きたい。

(いしい・さとみ／酪農学園大学)

未病予治について

林 義夫

現代は「健康か病気か」で分けているが、古く2000年前の中国の医書に未病の文字は見られ(黄帝内経)、「未病を治すを上医とし、已病を治すを下医とする」とある。今日、未病の話は医学、医療の面から消滅し、未病を知るドクターは少ない。未病とは、健康—未病—病気である。今日はメタボリックシンドロームが宣伝され、生活習慣病の上流とされている。私は、上流以前に源流があると主張している。私は「未病予治」なる新日本語熟語を造語し、特許庁より昨年8月9日に認証されている。その詳細につき報告する。

(はやし・よしお／医療法人社団 心友会)